

海外子女・帰国子女教育専門の教育アドバイザーに聞く



海外でのお子さんの教育環境選び

海外子女教育振興財団の教育アドバイザーに、滞在中と帰国後のお子さんの教育に関する課題(主に学校選択)について伺った。



公益財団法人 海外子女教育振興財団

教育アドバイザー 友部 政勝 さん

渡航前・滞在中・帰国後の難しい選択

—— 前ページの覆面座談会の印象は

通常、親は日本に戻ると「故郷に戻った」感覚で安堵^{あんど}します。子どもにとって日本は必ずしも「元の世界」ではなく、新たな文化環境なのでカルチャーショックを受けます。親の安心と子の戸惑い——この意識のズレが帰国後の学校生活に波紋を生むことは少なくありません。

今回の3人の保護者の方のお話は、そのズレを正面から受け止め、お子さんと対話しながら共に悩み、乗り越えていった記録でした。

「子どもは家族の一員である」という前提で、常に選択の場に同席させて、気持ちや不安を言語化させたことが再適応の成功要因であり、その姿勢には強く共感しました。子どもの言語や生活リズム、人間関係などの再構築には、数カ月から1年程度の時間はかかります。「帰国＝元の生活に戻る」ではなく、「第二の生活」として新しく設計することが大切です。

—— 赴任国での学校選びのポイントについて

「インター校か、日本人学校か」の二択ではなく、選択肢は多岐にわたります。バンコクを例にとると、日本人学校は小中を合わせた生徒数2千人を超える世界最大規模のマンモス校である一方、インター校は160校以上あり、規模や校風、教育方針や環境もさまざまです。学校選

択においては、少しでも多くの学校を親子で見学し、お子さんの性格や特性、家庭の価値観に合った教育環境の空気を感じ取ってください。

その情報収集には、公式サイトをはじめ、赴任者の先輩や日本人会・商工会の口コミ、さらには日系の不動産会社などもお薦めします。不動産会社には多くの生活情報が集まっていますし、学区制がある場合は「希望校から逆算した住居選び」も考えられます。

そうして選んだ学校でもお子さんにとって合わないと感じたら、すぐに転校するくらいの柔軟さがあって方がよいと思います。

インター校と補習授業校

—— インター校では帰国後の受験で苦労も

当然ながら、インター校では日本の国語や算数・数学、理科や社会は教えないので、帰国後の授業や受験で苦労します。インター校や現地校の在籍者のみが受験できる帰国枠のある中学や高校、大学もあります。ただし多くの場合、受験資格が帰国後3年未満などの条件があるので、タイミングの見極めが重要です。

また、インター校では英語が得意となる反面、その分、母語である日本語とのバーターが生じます。帰国後に日本で生活する上で、英語が話せても日本語が不十分という状況では、受験以前に日本人としてのアイデンティティーが失わ